

第1章

子どものワークショップ実践と研究のこれまで

1. 子どものワークショップ実践の状況

現在、地域の様々な場所で、子どもたちを対象にしたワークショップが行なわれている。ものづくりやダンス、演劇や音楽などの表現活動といったアート系の活動や、博物館などでの考古学や昔の暮らしや技術体験などの歴史系、アウトドアでの自然体験などの環境教育系など、その内容は多岐にわたる。日本における子どものワークショップ実践は、1980年代に萌芽的な議論や実践が始まり、1990年代に入って広く普及し始め、2000年以降に社会教育はもとより学校教育の実践現場にも広がった。そもそもは「工房」を意味し、中野民夫が「参加体験型のグループ学習」(2001, p. 132)と端的に定義するように、参加と体験に基づく学習活動として広く理解されている。教える人と教えられる人といった学校の教師と生徒のような関係の中で一方的に知識を伝達するような活動ではなく、頭だけでなく身体や五感も使って、楽しさを伴うような協同での創造活動や課題解決などのアクティビティを意味し、従来の硬直化した学習を越える新たな学習活動として理解され、広く取り組まれてきた。

今日、全国各地で日々実践されているワークショップの全貌を把握することは困難である。また、それらが本来の意味でのワークショップ実践であるかどうかを判別することも難しく、従来であれば「○○教室」や「○○講座」と呼ばれていた活動もワークショップと称しているのも事実である。片岡(2007)はこうした従来の学校教育のような定型の学習内容を提供する活

動もワークショップと称される場合があるとし、その理由とは諸外国から導入する事物全般に見られる日本独自のカタカナ英語としての意味が広汎に及んだ結果ではないかと述べている。高橋（2002）も1990年代後半は、講習会や実演、実習というかわりに何でもワークショップという言葉に置き換えれば参加者が気軽にやってくるという時期であったとも述べている。

筆者も学生時代に美術館でのワークショップについて手探りで学び始め、その後チルドレンズ・ミュージアムに勤務してワークショップに携わったが、それはまさに1990年代、ワークショップが広がりを見せ始めた時期であった。しかし1990年代半ば頃は、ワークショップという言葉に耳慣れない市民もまだ多く、子どもや保護者はもちろん、行政の担当者にもその意味を説明するところから仕事が始まるといった状況であった。そしてなんとか説明はするのだが、実際には「○○をつくる活動」といった、何らかの造形作品をつくる活動の新しい呼び方なのだろうといった理解や、「体験することがワークショップ」といった、とにかく活動の目に見えやすい部分でもって理解されることも多かった。その後、2000年代以降にワークショップは様々な領域で取り込まれるようになり、博物館や公共施設のイベントも必ずワークショップが併せて企画されるなど活況を呈し、ワークショップは日常の身の回りにあるごく普通の体験活動を指す言葉になったと言える。

2. ワークショップ研究における違和感と問題点

今日、ワークショップの実践は一般化し、実践に関する多くの記録集やノウハウが書かれた書籍、webサイト、実践報告や研究論文をたくさん目にするができるようになった。そうした中で近年、ワークショップに対する違和感も感じるようになった。ワークショップに関する様々な情報や言説が増えていく状況の中、自分でワークショップを行なっていて、その体験の実感が上手く捉えられていないように感じるが多くなったのである。毎回ワークショップは上手く進み、参加者もとても楽しく有意義な体験をしているであろうことは、場の様子や雰囲気、参加者の表情や振り返り、事後のアンケートからも窺い知ることができるのだが、そのことが実感レベルで

しっかりと感じられていないように思えるのである。また、ワークショップに関する研究論文を読んでも、書かれていることの多くはワークショップの実践者・研究者としてもよく理解でき、有益な知見も多いのだが、そこにもワークショップの実感についての欠如を感じることもよくあるのである。研究においては必ずしも体験の実感を捉えたり、表現することが目的とは限らないため、それは当然のことなのかもしれない。

では、こうしたワークショップに関する違和感とは何によるものなのか。経験を重ねることでマンネリ化し、新鮮さが失われたということだろうか。しかし、ワークショップを企画実践することは毎회가一期一会の体験の創出であり、惰性で続けてきたならば、とうの昔に何か大きな問題や失敗が出てきているはずである。慣れということならば、こうした状態はもっと早く訪れたはずである。

ここ20年程でワークショップの実践のあり様や捉えられ方といった周辺環境が大きく変化してきている。以前は特別な非日常の実践と見られていたワークショップも気軽に参加できる日常の活動の一つとなった今、その取り組みや意義、人々や社会に対する位置づけも変化してきている。そうしたなか、荻宿(2012a)も中野(2001)による定義以降の状況変化をふまえれば、ワークショップも再定義していく必要があるとし、新たに「まなびほぐし(アンラーン)」という学習論の立場からの定義を提案している。このように、新たな状況変化が生まれているとすれば、この違和感というのは筆者の個人的な問題ばかりとは言えないということになる。

3. ワークショップを語る言葉の変化の背後にある問題

ここで、ワークショップの実践を捉える視点や理論、ワークショップの実践を語る言葉の問題について考えてみる必要がある。確かに近年のワークショップと称する多くの活動は、かつてのような非日常性が際立つ特別な活動とは異なり、日常の生活とあまり大きな段差が感じられないものが多い。もちろん、そこに大きな非日常的差異が不可欠ということではないが、特別にワークショップと名乗るだけの目的や内容がないものが多数ワークショッ